

## 巳年の年頭にあって思う

今年の干支は巳年（へび年）である。へびと言えば、「蛇足」「やぶへび」「鬼がでるか蛇がでるか」といったように、あまり良い意味でないたとえに使われることが多い。足を持たない長い容姿や、毒をもつ種が多く存在すること、脱皮を繰り返すようすが、その原因であろうが、逆にそうした特性や強い生命力から、「死と生」「復活・再生」の象徴とされ、神の使いとして信仰の対象とされることもある。

有名なものには、ギリシャ神話に登場する医神アスクレピオスが持つ杖「アスクレピオスの杖」がある。このへびが巻きついた杖は、世界保健機構（WHO）の旗章にあるように、世界的に医療・医術の象徴として用いられている。

日本においても、へびが登場する神話としては、古事記や日本書紀における「ヤマタノオロチ」が有名だが、大蛇が大きなものを丸飲みするようすから連想されたとされる。この神話は、頻繁に氾濫する河川を、長くくねくねとしたへびの体になたとえて、そのへび（ヤマタノオロチ）を「ヤマトタケル」が退治するさまを、治水になぞらえたことから誕生したという説もあり、へびを古くから水神として祀っている地域も多い。

ところで、十二支における巳年には、どのような由来があるのであろうか。「漢書 律曆志」によれば、「巳」は「止む」を意味する「巳」とされ、草木の成長が極限に達して、次の生命が宿され始める時期と解されている。また、「巳」の文字は、「胎児」を表す象形文字であるとする説もある。そのような解釈に基づいて、過去の巳年がどのような年であったのかをみると、興味深いことがわかる。

前回の巳年、すなわち12年前の2001年には、まず1月に中央省庁が、それまでの1府22省庁から1府12省庁へと再編された。4月には、その前年に発足した「第2次森内閣改造内閣」が総辞職し、「第1次小泉内閣」が誕生している。この年から旧来の派閥主導型政治から官邸主導型政治へと変貌したと同時に、新自由主義がわが国を席卷し、その後の「成長の実感なき成長」

とともに「弱者を切り捨て、格差が拡大する社会」へとつながっていったことは、周知のとおりである。そして9月には、「アメリカ同時多発テロ事件」が勃発し、その後の国際秩序が大きく変わったことも記憶に残る。

24年前の巳年、1989年には、1月の昭和天皇崩御を受けて「平成」の幕開けがあった。また、4月から新たに施行された消費税（当時は3%）とさまざまな政治スキャンダルによって、7月に行われた第15回参議院議員通常選挙では日本社会党が大躍進を果たし、後に誕生する村山政権の足がかりとなった。さらに11月には、連合（日本労働組合総連合会）が誕生し、従来の労働運動の枠組みを大きく変えたのもこの年である。

このように見ると、巳年は、それまでの大勢からの大きな変化と転換が起こる年であるとも言えるのではないだろうか。昨年末に起こった政権交代が、今年わが国の将来に明るい変化をもたらすのか、あるいは、新自由主義が「復活」し、3年数カ月前に起きた歴史的政権交代によって育まれつつあった眞の議会制民主主義から「胎児」に戻って、歴史を繰り返してしまうのか。

それを決めるのは、私たち国民であることは間違いない。先の衆議院議員総選挙では、投票率が戦後最低の59.32%となり、4割を超える多くの有権者が自ら選択する権利を放棄した。もういい加減に「誰かがやってくれる」「誰かが決めてくれる」という依存体質から脱皮しなければならない。少なくともそれは、わが国の子どもたちの将来に対する大人としての最低限の責務である。現代においては、ただ待つのみでは「ヤマトタケル」は現れないのだ。野党となった民主党も「蛇に噛まれて朽ち縄に怖じる」ようであっては、まさに「竜頭蛇尾」になってしまう。政権が変わっても、わが国に山積する課題は残されたままだ。初心に戻って「再生」を懸ける一年になることを期待したい。

（連合総研主任研究員 小熊 栄）